
ソウルワールド

桜三里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ソウルワールド

【Nコード】

N1060BA

【作者名】

桜三里

【あらすじ】

大手ゲーム会社から発表されたVR－MMORPG、『ソウルワールド』
一千万以上の応募があったクローズドβテストに当たったらしい我が家の妹様と、何故か一緒にプレイすることに。いや俺部活あるしえ？部活にも勉強にも一切支障なし？そんな夢のようなゲームがあるのかよ

初投稿です。少しでも楽しんでいただければ。

プロローグ

ソウルワールド。

日本どころか世界的に見てもトップクラスの技術力を持つ日本のゲーム会社、『トライアングル・エース社』が、その最新技術を惜しみなく使って作り上げた、世界初のVR—MMORPGである。

VR、つまり『バーチャルリアリティ』という名前からわかるように、仮想現実世界、つまり現実と何ら変わらない感覚でゲームができるという、ゲーム好きにとってはまさに垂涎の逸品だ。

さらにMMORPG、大規模オンラインロールプレイングゲームということで、家にいながらにして数多の別プレイヤーと協力をしながらゲームができるという優れものだ。

もともと、まだ一般には出回っておらず、ネット上では確定情報として囁かれていたものの、実際に企業からは何のアクションもなかった。噂ばかりが先行しているという現状に、ただの都市伝説と化するのもそう遠くないと言われていたのだが。

そんな『トライアングルエース社』から、ついに正式発表されたのが先日のこと。さらに正式なサービス開始まではまだ時間がかかるものの、抽選でクローズドβテストを募集するとの正式発表があり、ネット上は瞬く間に大炎上した。

その抽選枠は五千人だったらしいが、応募はなんと一千万を超えたりらしい。

そして、そんなクローズドβテストが、本日夜11時より行われる

そうな。

「そういうわけで兄さん、一緒にやりましょう」

以上、我が妹、二ノ宮麻衣から与えられた情報の全てである。
どうして俺は、部活で心底疲れて早く風呂に入りたい状況、玄関先でこんな話をされているのだろう。というか、まだ靴も脱いでない。

「なあ妹よ、どうして俺は玄関先でこんな話をされているわけだ？」

「私がクローズドβテストの抽選に当たって、端末が届いたんです。
一つの端末で最大二人までプレイできるということで、兄さんも一緒にどうかと」

「うん、兄さんとしてはまず『お帰りなさい』かそれに準ずる言葉が欲しかったよ」

「お帰りなさい兄さん。どうでもいいですけど『お帰りなさい』という言葉は丁寧に『帰れ』と言っていると思いませんか？」

ようやく目的の言葉を聞くことができたものの、余計な一言がついてきた。

まあ、これがうちの妹の通常状態だから仕方ない。

「……で、なんだ。ゲームをしろ、ってことか？　つまりは」

「はい。一緒にやりましょう」

「無理。部活あるし」

「大丈夫です。部活動にも学業にも一切支障はありません」

「はあ？」

部活にも勉強にも一切支障がないゲームって、一体なんだ。そんなゲームが存在するなら、世のお母さんは「ゲームばかりしてないで勉強しなさい！」と子供を叱ることはないだろう。

「そうですね……詳しくは夕食の後にお話します。兄さんもお疲れでしょうし、長い話になりますのでお風呂に入ってからにしましょう」

「兄さんとしては、その気遣いがもう少し早く欲しかったかな」

具体的にはソウルワールドの話を始める前くらいに。

まあ何にせよ、ようやく俺は解放してもらえるらしい。やっと靴が脱げる。

「では兄さん、お風呂を上がって、夕食を食べたら私の部屋に来てください。そこで詳しく話しますので」

「ああ、分かった。飯食ったら麻衣の部屋に行くよ」

「はい」

そこでようやく、我が家の妹様から解放。

さて、さっさと風呂に入りますかね

妹の部屋にて

風呂から上がって、お袋が作り置きしていた夕食を温めて食べ、俺は二階にある俺の部屋の隣、麻衣の部屋へと行った。

可愛らしく『まいのへや』というプレートがかけられた扉を、軽く二回叩いて開く。当然ながら、向こうからの返事があるわけではない。だって待つわけがないし。

「入るぞ」

「兄さん、その言葉はノックの後に扉を開けずに言うものです」

若干の呆れを孕んだ声で、ベッドに腰掛けていた麻衣がそう注意してきた。もっとも、もう無駄だと分かっているからか溜め息混じりだったが。

「とりあえず……適当にそのあたりに掛けてください」

「おう」

言われた通りに、座布団を敷いてあるちゃぶ台の脇へと座る。麻衣もそれと共にベッドから降りて、俺の右側90度の位置へと腰掛けた。

それと共に、先程まで読んでいたのだろう分厚い冊子をちゃぶ台の上を広げる。

「まずは……ええと、あれがソウルワールドの端末です」

そう言って麻衣が指さしたのは、2リットルペットボトルより少し大きい程度の機械と、それにコードで繋がっている二つのヘルメットだった。バーチャルリアリティとか仮想現実とか大層なことを言っていたから、もっと大きいのかと思っていたが思いの外小さい。

「まず兄さん、ソウルワールドは夢のゲームです」

「それはもう聞いた。よっぽど凄いゲームだったのは分かったから」

「いえ、そういう意味ではなく、本当に『夢』そのものがゲームなんです」

夢がゲーム？

「どういうことだ？」

「言葉通りですよ兄さん。ソウルワールドは睡眠中のみ行うことができるゲームです。脳波がとうとうとかは私に聞かないでくださいね。分かりませんし」

「それって、疲れ取れるのか？」

睡眠ってのは脳を休ませるためにするものだと聞いたことがあるのだが。

「それは私にも分からないですよ兄さん。ですけど実際、この説明書にはそう書いてますから。でも、もしも説明書の通りなら、部活動にも学業にも一切支障がないでしょう？」

確かにその通りである。夢の中であるというなら、部活には何の影響もないだろう。

勉強？最初からするつもりなんてないから気にしない。

「ふーん……まあそれなら、大丈夫だな」

「じゃあ兄さん、一緒にやってくれますか？」

「とりあえず……試しに今日はやってやるよ。でも欠陥品で、全然疲れがとれないみたいな状態だったらやらないからな。明日も朝練あるし」

「それでかまいません。兄さんの都合を無視してまで、一緒にやろうとは思いませんから」

うん、殊勝な考えである。常にその気持ちを持っていてほしいものだが、残念なことに玄関先で兄を拘束する程度には俺の都合を無視している気がする。

さて、では早速。

「んじゃ、始めるか」

「兄さんは人の話はちゃんと聞く人ですが、残念ながらちゃんと覚えていてくれない人なんですよね」

はあ、と大袈裟に溜め息をつく麻衣。俺が何か間違ったことをしたのだろうか？

「さっき玄関で言ったと思いますが、クローズドβテストの開始は

夜11時からです。まだ2時間以上もありますよ」

ああ、そういえばそんなことを聞いたような。
うん、聞いたな。うん。

「じゃああと2時間以上も何するんだ？」

「そんなことは決まっているでしょう兄さん」

ふふっ、と麻衣は微笑む。その笑顔は非常に魅力的で、兄弟であっても可愛いと思えるものだったが。

その手が取るのは、先程麻衣がちゃぶ台に置いた分厚い冊子。

「説明書を一緒に見ましょう」

え？

まじで？

そのやたら分厚い本が説明書？
普通ゲームの説明書ってペラペラの薄いやつじゃないの？

「まずは職業を決めないといけませんね……。私は魔法職にするつもりですけど、兄さんは戦士職の方が好きそうですね」

「うん……まあ、お前の好きにしてくれ」

「いえ、やはり兄さんの職は兄さん自身が決めるべきです。クロージドβテストでどうせ消えるキャラクターとはいえ、慎重に選ばないといけません」

そういう気遣いいらないから！

って、え？

「へ？ 消えんの？」

「ええ。クローズドβテストというのは、そういうものです。言ってみれば一定の期間、色々なプレイヤーがいる状態でのバグ発見だとかそういう仕事をするんですよ。クローズドβの期間が終われば、データはリセットされます。オープンβテストで、改めて一から育成ですね」

「ふーん……じゃああれか、体験版みたいなもんか」

「そんな感じですよ」

その後も、説明書を見ながら麻衣とやいやい言っていたら、気づけば11時になっていた。

ログイン

「あと十分くらいでログインの時間ですね」

言いながら、麻衣が端末からコードで繋がったヘルメットを被る。俺も同じように、ヘルメットを装着。ご大層なコードの数々に対して、感触は柔らかい。これなら、このまま眠ることができるだろう。

「ログイン時間を23時に設定……と」

「なあ、麻衣」

「どうかしましたか兄さん？」

「いや……確か聞いた内容を考えると、ソウルワールドってのは夢の中のゲームなんだよな？」

「ええ、そうです。どうかしましたか？」

「俺はどこで寝ればいいんだ？」

ここは麻衣の部屋である。当然、お互い思春期であるので同じ部屋で眠るということはない。勿論ながら、ここに俺用の布団など準備しているわけもない。

部屋を軽く見回しても、あるのは麻衣のベッドとちゃぶ台、それにパソコンデスクと椅子くらいのものである。人がもう一人眠るスペースは、当然ながらない。

麻衣は軽く、申し訳なさそうに首を傾げて。

「……床？」

「なんでだよ！ フローリングに直寝しろってか！」

「いや、だって床以外に」

「なんか選択肢あるだろ！ 布団持ってくるとか！」

「だって布団敷くのならテーブルとか動かさなきゃいけませんし……」

「そのくらい動かしてくれよ！」

あまりに理不尽な我が妹に、思わずそう声を上げてしまう。

いや、普通人間、床で寝ろと言われたら大抵こんな反応を返すと思う。もしも喜ぶ奴がいるとすればそいつはドMだ。間違いない。そして俺は当然ドMなわけではない。つか、妹相手にドMってもう犯罪者の香りしかしない。

ちなみに、俺の寝場所を床に限定しやがった我が家の悪魔は、既にベッドで布団を被って準備万端である。殴りてえ。

「さて、兄さん。時間ですよ」

「いや、だから俺の寝る場所……」

続きは、言葉にならない。

言いようもない感覚と共に、意識が闇に落ちる。まるで酒に酔った酩酊状態みたいに、足に力が入らない。

足がその力を失い、支えを失った体が床と接触する。

意識を失う瞬間に考えたのは。

（そういえば夜中にトイレ行きたくなったらどうするんだろう）

なんて、どうでもいいことだった。

N o w l o a d i n g . . .

L o g i n c o m p l e t e

W e l c o m e t o
” s o u l w o r l d ”

ログイン（後書き）

これでプロログ終了です。

次からはソウルワールド内での場面になります

初日 1

体のワイヤーフレームが形作られると共に、慣れ親しんだ自分の体が投影される。

自分の体がワイヤーフレームからできていく一部始終を見るというのも、なかなかシュールな体験だった。

「ソウルワールドへようこそ」

誰もいない空間。地面以外の何一つ存在しない場所に、そんな声が響く。

機械的な女性の声だ。まあ、野太い男の声に歓迎されるのも嫌だけど。

「まずはプレイヤーネームを入力してください」

アナウンスと共に、目の前に小さなスクリーンが現れる。空中に浮いていて半透明のそれをスクリーンと称していいのかは分からないが。

スクリーンにあるのはアルファベットと数字。どうやら平仮名や片仮名は使えないらしい。

さて、しかし名前とな。

この入力した名前で、これから俺は呼ばれることになるわけだ。変な名前はつけられない。

かといって、あまりに自分らしくないかっこいい名前をつけたとしても、多分呼ばれて気付かない。つまりある程度呼ばれ慣れている

名前にした方がいいだろう。

『お願いですから兄さん、ちゃんとした名前をつけてください。間違ってもトンヌラとかゲレゲレとかつけないようにしてくださいね』

と、ログイン前に麻衣に言われたことを思い出す。

トンヌラとかゲレゲレとか何を言ってるのか分からなかったが、まあ大体趣旨は理解した。さすがに変な名前をつけた奴と一緒に歩きたくないということだろう。

少しだけ悩んで、スクリーンのタッチパネルに指を伸ばす。

『N I N O』

幼なじみとか、学校でも仲のいい友人は俺のことを『ニノ』と呼ぶ。

まあ、名字が二ノ宮だからなのだが。

だからまあ、これなら問題ないだろう。

最後にOKを押し、そのまま名前が承認された。

「それでは次に、職業を選択してください」

再度出てくるパネル。選択肢は四つ。

- ・戦士
- ・魔術師
- ・商人

・盗賊

明らかに盗賊って職業じゃなくね？という疑問は浮かぶが、まあそれは仕方ない。昨今のゲームでは盗賊が職業扱いなのだ。

僧侶がないのが少し疑問だが、魔術師に回復タイプの上級職があるのだと麻衣が言っていた。

少し悩んで、選択。

・魔術師

いや、だって折角ファンタジーな舞台なわけだし、魔法使いたいよね？

戦士タイプは戦うことに特化しているものの、魔法は覚えないらしい。でも基本的に勇者って最強呪文覚えるし、基本的には殴るよな。

魔法×戦士Ⅱ勇者

うん、我ながら完璧な考えだ。

タッチパネルのOKを押し、頷く。

「ユーザーネーム『NINO』、職業『魔術師』でよろしいですか？」

確認の質問に、OKボタンをぽちっとな。

「登録が完了しました。ランダムで6つ、アビリティカードとスキルカードがプレゼントされます」

え、ランダムなんだ。てゆーかスキルカードって何さ。

「詳しくは右ポケット内にある『携帯電話』を確認してください」

アナウンスに右ポケットへ手をやると、スマートフォンにもう大部分のユーザーが移行した現在に関わらず、二つ折りの携帯電話があった。

開くと、先程の言葉通りにある。

name…NINO

job…magician

setcard

avility

・『高速詠唱Lv1』

・『魔法威力上昇Lv1』

・『杖Lv1』

skill

・『ファイヤーボールLv1』

・『サンダーLv1』

・『??? L V 1』

なんだよ、?って。

選択してみると、『現在のレベルでは使用できません』と出てきた。そんなもん初期に渡すなよ。

カチカチと色々と携帯電話をいじってみる。

ふむ、これでアイテム使用とかもできるらしい。使用というか、取り出しか。どれだけ大量のアイテムを持ってもこれ一つで運べるというのはありがたい。

あとは携帯電話の通常機能、他プレイヤーとの通話、と。

とりあえず麻衣の番号は入れとかなきゃいけないな。

あれ？

なんか目の前のタッチパネルにYES／NOがある。やべえ話聞いてなかった。

とりあえずYESを押しておく。

NOだとなんか後が怖いし。

が、そんな俺の予想は、見事に裏切られた。

「ではチュートリアルをスキップします。ようこそ、ソウルワールドへ」

え？

チュートリアルってあれだよな。ゲーム内容を詳しく教えてくれるやつ。

最初の村で「武器はちゃんと装備しろよ」と言ってくる村人的な役割の人が大勢いるイメージの。

それをスキップってことは。

「ではゲームをお楽しみください」

その言葉を最後に、目の前に光が満ちた。

初日 2

瞼を閉じていても感じる眩しさは、数秒程度だった。

恐る恐る薄目を開けると、そこは先程までの何もない空間ではなく、まるで中世ヨーロッパのような石造りの広場。中央には噴水が湧き出て、幾つかのベンチが置いてある。

遠くに見えるのは、尖塔のある厳かな城。突き抜けるような青空と漂う雲の流れは、本当にここが仮想現実空間なのか疑問に思ってしまうほどのリアリティを持っている。

現実と異なる点といえば、辺りにいる人間の格好が誰も皆似たような格好をしていることと、一部の人間の上に黄色の文字が名前として浮かんでいることか。恐らくNPCなのだろう。動いてないし。

さて。

チュートリアルをスキップしてしまったせいで、何をすればいいのかさっぱり分かん。

別に仮想現実空間であるから立っていても疲れるわけではないのだが、なんとなく身の置き所がないため近くの縁石に座る。

とりあえず何も情報がないわけだから、携帯電話でも確認しよう。

画面には、先程見た内容と全く同じものが書かれている。

name..NINO

j o b : m a g i c i a n L v 1

s e t c a r d

a v i l i t y

・ 『高速詠唱 L v 1』

・ 『魔法威力上昇 L v 1』

・ 『杖 L v 1』

s k i l l

・ 『ファイヤーボール L v 1』

・ 『サンダー L v 1』

・ 『??? L v 1』

m a g i c i a n の隣にレベルが追加されている以外には何も変わらない。

恐らく設定画面からフィールドへ出たことで、レベルが追加されたのだろう。

i t e m の項目を確認。

・ ウッドロッド

・ E 布の服

・ ポーション 5 個

・ 地図

なんとも寂しい。たったの4つしかない。Eと書かれてあるのは装備済み、という意味か。つまり、ここにいる大多数と変わらない無個性なこの服は『布の服』なのだろう。どうでもいいけど布地以外で作られた服って俺見たことないな。

あとはfriendlist、mail、くらいのもだった。残念ながらヘルプ機能はないらしい。

「さて……」

携帯電話の画面から目を離し、嘆息。

「……何すりゃいいんだろ」

どう考えても前途多難だった。

「まずは……うん、あれだよな。装備」

先程見たitemの項目から、ウッドロッドを選択する。

「取り出しますか？」

YESを選択し、エンター。

それと同時に、俺の右手へと軽い重量感がかかる。

特に何の演出もなく、俺の右手にはその辺の木の枝のような太い棒、ウッドロッドが握られていた。

これで装備できた、という認識でいいのだろうか。item画面はEウッドロッドに変わっている。

よし、これで最初の村人の助言、武器の装備はばっちりだ。

「とりあえず……行くか！」

ここであらう一人でも悩んでいても仕方ない。

武器も魔法もあるんだから、まずは街近辺のフィールドでレベル上げをするのが定石だろう。

腰を上げ、広場の北門へと向かう。

恐らくチュートリアルを終わらせたのであろうプレイヤーたちが、東門を目指していることなんて知らずに。

初日 3 初戦闘

北門を抜けた先にあったのは、草原だった。

突き抜けるような青空。

地平線まで続く広大な草原。

涼やかに頬を撫でる風。

そこに立って、なんかやたらと血走った目で俺を見てくる1メートルくらいの子鬼。

風景ぶち壊しだった。

「と、んなこと考えてる場合じゃねえか」

子鬼は明らかにモンスターなわけで、その矮躯に見合った小さめの棍棒を、今にも振り上げて襲いかかってくる直前である。

よし、ここは先制で魔法だ！

「ファイヤーボール！」

杖に力を込め、叫ぶ。

スキルカードにあった魔法だ。多分スキル名を唱えることで、魔法が発動されるはずだ。

……

えーと。

杖は「いや俺木の枝だしそんな機能ありませんよ」とでも言いたげに、微動だにしない。
当然ながら俺の期待した、杖の先から炎の玉が飛び出してポーンという展開もない。

予想と違う展開に、思わず首を傾げる。

おかしい。

俺魔術師だし、間違いなく魔法を覚えているはずだ。なのに魔法が使えない。

魔法が使えない魔術師なんて、ただの師じゃないか！

と、俺が一人でテンパっている間に、子鬼が棍棒を振り上げてこちらに向かってきた。

体に見合った素早い動きで間合いを詰めてきて、棍棒を振り下ろしてくる。

なんとか混乱しながらも、俺は杖でそれを受け止める。やはり初期

の敵でしかも小さいわけだから、そこまで力も強くない。杖でもなんとか受け止めることができた。

さらに子鬼の連撃。

絶え間なく振り上げられ振り下ろされる棍棒の攻撃を、その都度杖で受け止める。

なんとか防げてはいるが、攻撃手段がない。魔法が何故か使えないし。

つか。

なんかムカついてきた。

なんで魔法使えないんだよ。おかしいだろなんか色々。俺のやり方がおかしいのか？ だったら教えてくれよ。なんでチュートリアルスキップとかするんだよ。いや確認しないでYES押した俺も俺だけだ。

子鬼がもう一度、棍棒を振り上げて。

「だああああっ！ うぜえっ！」

思いつきり、子鬼の顔面をぶん殴った。

小さな体が跳躍している状態で殴りつけたため、子鬼が後ろに吹き飛ぶ。

子鬼の上に浮かんでいる緑色のバーが、二割ほど減った。

あれ？

なんだ、ぶん殴ったら倒せるのか。武器とか魔法使わなくても。

子鬼が立ち上がり、再度こちらへと向かってくる。

そんな子鬼に向けて、思いつきり杖を振り上げて、そのまま脳天に振り下ろした。

若干太い木の枝みたいな杖が、子鬼の頭へと当たって鈍い音を立てる。緑色のバー、多分HPバーが残り二割まで減った。

「寝てろおっ！」

そのまま、子鬼の顔面を、もう一度ぶん殴る。

そこでようやく、子鬼のHPバーはようやくゼロになった。

「レベルが上がりました」

「アビリティカードのレベルが上がりました」

子鬼が光の粒子として消える瞬間に、そんなアナウンスが脳内に響いた。

name..NINO

job..magician Lv2

setcard

avility

・『高速詠唱Lv1』

・『魔法威力上昇Lv1』

・『杖Lv2』

skill

・『ファイヤーボールLv1』

・『サンダーLv1』

・『???Lv1』

獲得アイテム

・小さな棍棒×1

・ゴブリンの髪束×1

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1060ba/>

ソウルワールド

2012年1月4日09時46分発行